

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-139	13-053	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
題名 (原題/訳)		
Alcohol consumption is a risk factor for colonic diverticulosis. 飲酒は大腸憩室症のリスク因子		
執筆者		
Sharara AI, El-Halabi MM, Mansour NM, Malli A, Ghaith OA, Hashash JG, Maasri K, Soweid A, Barada K, Mourad FH, El Zahabi L.		
掲載誌		
J Clin Gastroenterol. 2013 May-Jun;47(5):420-5. doi: 10.1097/MCG.0b013e31826be847.		
キーワード		PMID
飲酒、大腸憩室症		23164685
要 旨		
<p>目的： 大腸憩室症の予測因子として加齢のみが知られている。本研究では飲酒と大腸憩室症との関連を明らかにすること。</p> <p>方法： 本研究は横断研究であり、対象は大腸内視鏡検査を受けた憩室症の症候がない 746 名に質問票にて食事、社会環境等について調査を実施した。加えて全世界の酒類消費量、憩室症有病率について情報を収集した。</p> <p>結果： 対象の 746 名は平均年齢 61.1 歳（標準偏差 8.3 歳）で、憩室症の有病率は 32.8 %（95%信頼区間 29.5 - 36.2 %）であった。単変量解析では、年齢、性別、腺腫性ポリープ、新生組織形成、アスピリン服用、飲酒において有意に憩室症との関連がみられた。これら因子を調整した多変量解析では、年齢、新生組織形成、飲酒が有意に独立して憩室症と関連していた。憩室症に対する飲酒者の多変量調整オッズ比は 1.91 (1.36 - 2.69) で、飲酒量が多いほどオッズ比が高値であった (trend P = 0.001)。世界 18 カ国の 1 人当たりの酒類消費量と憩室症有病率の間には強い相関がみられた (r = 0.68 ; P = 0.002)。</p> <p>結論： 飲酒が大腸憩室症の有意なリスク因子であることが示唆された。これにより疾患有病率や発症の仕方に関する東西パラドクスが部分的に説明される可能性がある。飲酒と憩室症の関連のメカニズムについては、今後の解析で明らかにしていく必要がある。</p>		